

okaeri

『オカエリ』 瀬多海人

「……ついに、か」

ふいに聞こえたつづやきに僕は声のした方を見た。

祖父の葬儀に参列した客の一人だろうか。喪服姿の浅黒い男がすぐ後ろに立っていた。まだ日が高いというのにその表情はけぶったように伺い知れない。

“ついに”という言い回しとどこか嘲笑するように歪んだ口元が不快だったが、あえて抗議をする気にもなれず、そのまま流す。つまり祖父は僕にとってはその程度の存在だったのだ。

男から視線を逸らし、火葬場の煙突から冬空にゆっくりと立ち昇ってゆく細い煙を見上げながら、人の死というものは意外と呆気ないものだと思う。

あの祖父が亡くなるだなんて、今の今まで思いもしなかった。

「祖父とはどのようなお知り合い……」と僕は再び視線を男に戻そうとしたが、すでにその姿はどこにもなく、ただ寒々と広い駐車場が広がっているだけだった。

「消え……た？ まさかな」

× × ×

祖父が何の予兆もなくぽっくりと逝ってしまったのは、つい一昨日のことだ。齢九十六歳だというから大往生だといえる。

進学のために故郷を離れていた僕が急を知らせる電話で実家に戻ったときには、すでに祖父の息はなかった。枯れ木のように細く萎び、骨だけが浮き上がった身体が布団に横たわっている様はもはや“モノ”としか思えなかった。その“モノ”を見下ろしながら、僕の中には哀しみやそれに類する感情が一切湧き起こってこなかった。

唯一あった感情といえるのは“解放感”だろうか。

そう。祖父の死によってようやく僕は——僕たち家族は解放されるのだという想い。

あとは永遠に続くかと思えた祖父という呪縛から、何の心づもりもなく突然解き放たれたことからくる放心。

何の根拠もないまま祖父は永遠に存在し続ける。そんな風に思っていたというのに、突然降ってわいた解放に僕たちは戸惑いを覚えていた。

大正生まれで昭和という激動の時代を生き抜いてきた祖父は、僕にとって幼い頃より畏怖——いや、むしろ恐怖の存在でしかなかった。祖父の周りに漂うねっとりと重く沈鬱な空気。そして落ちくぼんだ眼窩の底から、ぎょろりとした目が恐ろしげに睨み付けてくる姿。それだけが深く印象に残っている。

優しい言葉をかけられたことなどない。そもそも上京するまでの十数年は一緒に住んでいたと

いうのに言葉を交わした記憶すらほとんどない。祖父は自室に籠もって延々書き物をしていて、部屋の外に出てくることがなかった。食事ですら母が襖の外に膳を置いておくため、一緒に食卓を囲んだこともないのだ。

僕が小学校にあがったばかりの頃だったろうか。生意気盛りの好奇心からか、祖父の部屋の襖に手をかけたことがあった。だが、そろりと開いた隙間を通して、振り返った祖父と視線が交わった瞬間、僕は声も出せぬままおこりのように震え、その場に立ちすくんでいた。薄暗い和室の奥から細く開いた襖を通して睨みつける、祖父のぎょろりとした目が暗く澱んだ光を湛えていた。骨張った腕が“あちら側”へと誘うかのように僕に伸ばされる。

怖い。怖い。コワイ。

凍り付くような恐怖というのを初めて感じた瞬間だった。

襖一枚隔てて別の世界がこの先にあり、今すぐにここから逃げなければ連れ去られてしまうという恐怖。それでいて“あちら側”を覗いてみたいと思う自分もいたのだ。

恐怖と好奇心がないまぜになった感情の中で、僕は祖父の奥に垣間見えた深淵に囚われてしまっていたのかもしれない。退くことも進むこともできぬまま、自分に迫る骨張った腕を見つめていた。

その後、母が名を呼ぶ声でようやく我に返った僕はひたすらに走ったことを覚えている。地方の農家とはいえ狭い家である。母のもとにたどり着くのにはどれほどの距離があるわけでもない。だが、そのときは母のいる台所までの距離が永遠にも感じられた。ようやく母のもとにたどり着いた俺は理由も言わず、ただ泣きじゃくるしかできなかったことを覚えている。それが唯一といっていい祖父との思い出——いや、記憶に深く刻み込まれてしまった呪縛。それ以降僕は二度と祖父の部屋に近づこうとはしなかった。目的があったわけでもないのに早く家を出たいと願い、そして東京の大学へと進学を決めたのもこの呪縛から逃れたかったからだ。

「それで……遺品……だけだな……」

葬儀を終えたあとふいに父が言った。沈鬱な響きだった。父のその感情もまた実父を亡くした哀しみからくるものではない。父も母も僕の前では決して言葉には出さなかったが、祖父という存在に倦んでいたのは明らかだった。出来るものならば死を境にこのまま存在を忘れ去りたいとさえ、思っていただろう。

だが、亡くなった祖父の部屋をそのままにしておくわけにもいかないという家長としての責任感が勝ったのか、徐々にであって遺品整理に手をつけねばと父も自分に言い聞かせたのだろう。半ば家を捨てたつもりになって上京した僕だったが、父母との縁を切るほどの覚悟があったわけではない。父にこう切り出されては、自分だけがさっさと東京へと戻ることができるわけもなかった。

× × ×

祖父が逝って一週間が経っていた。遺品整理を、とは言ったものの父はまるで祖父の部屋そのものが忌まわしき場所であるかのように近づこうとしなかった。無為に時間だけが過ぎてゆくことに、僕も焦れ始めていた。僕とていつまでも講義を休むわけにいかない。それでなくとも今期は単位が危ういのだ。そろそろ大学へと戻らねばならないと告げると、ようやく父はその重い腰をあげた。

とはいえ、僕自身も祖父の部屋へと至るキーキーという廊下に行く足取りは重かった。ようやくたどり着いた襖を前にすると“あの日”の記憶が鮮やかに蘇ってくる。祖父は既に茶毘に付された。なのにこの襖を開けた瞬間“あの日”と同じように、薄暗い和室の奥では祖父がぎょろりと目を剥いているような気がする。そんなわけがない。そんなわけがないというのに――。

「……開けるよ」

あえて言葉にする。横にいる父に問いかけたわけではない。言葉にすることで自分の背中を押したのだ。

襖が開け放たれると、そこには主を失った何の変哲も無い和室があるだけだった。ふうと安堵の息が漏れる。閉め切ったままだったためか、わずかに黴臭さとじめっとした空気を感じる。それ以外は小さな文机とその上にきっちりと揃えられた文箱。そして書棚には几帳面だったであろう祖父の性格をそのまま顕すように著者ごとに並べられた書籍があるだけだ。書籍もありふれた時代小説と歴史書だけで、処分してもいくらにもならないだろう。あまりに簡素にすぎる――それ以上に祖父が長く暮らしていたとは思えないほどに生活感のない空間だった。

“あの日”襖を隔てた向こう側にあった別世界はここにはなかった。

“あの日”感じたのは、よくある子供の非現実的な夢想でしかなかったのだろうか。

押し入れを開けるとさらに濃い黴の臭いが立ちこめ、思わず顔を背けてしまう。だが、それとて閉め切ったままの押し入れではまああることではないだろうか。じっとりと湿度を帯びた布団が鎮座しているのみで、他に何があるわけでもない。いっそ怪しげな呪術書やこの世のものとも知れぬ生物を模した像でも出てきてくれれば、「やっぱり」と納得できたのかもしれない。

やがて僕は笑みすら浮かべている自分に気づいた。あれほど恐れ、触れることを避けてきた祖父という存在が突然滑稽なものに思えてきたのだ。

別世界？ 奥にある深淵？

そんなものどこにもなかった。父も母も、そして僕も勝手な妄想を膨らませていただけで、何のことはない。ここにいたのは老いて偏屈になった、ただの痩せ老人でしかなかったのだ。そんなまやかしに囚われて何十年も怯え、ただただ恐れの中で暮らしてきたのかと思うと笑うしかないじゃないか。

「父さん」

帰郷してから初めてというくらいに明るい声で話しかけた僕に、父からの反応はなかった。い

つのままにか出ていったらしい。遺品の整理を僕に任せただけでいなくなるのも無責任な話だと思ったが、祖父という呪縛から完全に解放された僕にとっては些細なことではなかった。どうせすぐに戻ってくるだろうから、すこしでも整理を進めておくことにしよう。

そう思って視線を落とした先にはもう一つの文箱があった。文机の上に置かれていたものよりも一回り大きい以外は、何の変哲も無い文箱だが、こんなものどこにあったのだろうか。おおかた父が探し出したのだろうかと思点すると、僕は何の気なしに蓋に手をかけた。先ほど見た文箱と同様に何通かの葉書が入っているのだと思っていたのだが、予想に違えてそこにあったのは革張りの日記帳だった。四隅がこすれ、わずかに剥がれているところを見るとかなり使い込まれたものようだ。もしかして祖父が毎日部屋で書いていたものはこれなのだろうか。死が訪れるまでの日々を記した日記帳。そこには僕の知らない祖父の姿があるのかもしれない。そう思うと興味が湧いた。

手に取った日記帳は飾り気はないがしっかりとした装丁でずしりとした重さを感じた。表紙をめくり、さらに頁を繰ろうとした手がふと止る。この期に及んで故人のものとはいえ、他人の日記を読むことへの後ろめたさが生じた？ 否。そんなものではなく、この古びた日記帳の中に封じられた幾多の“過去”が頁を繰るごとに新たな呪縛として現出するのではないか。そんなことをふと考えてしまったのだ。

冬であるというのに、じとりと首元に汗を感じる。

「な、なにを馬鹿なことを……」

声が震える。いまだ祖父の呪縛に囚われているというのか。

つまらない妄想が先走ってしまったが、手にしているのはなんてことはないただの日記だ。何の変哲も無い日記なのだ……きっと。

頁を繰り、字面を追ってゆく。だがそこに記されていたのはありふれた日記ではなかった。手記。そう、とある事件について書かれた手記というべきものだったのだ。

「昭和十一年……二月……二十六日」

文中の日付が目飛び込んできた。

その日付がどのような意味を持つのか、僕にでも理解できる。いわゆる二・二六事件。ただ、その日付が意味することは理解できても、史学を志したわけでもなく、ただどこかの大学に入ればよい——そう、ただ単にこの家を離れたかっただけなのだ——という程度にしか勉強してこなかった僕には、陸軍青年将校の一团が兵を率いて決起、首都中枢を占拠した、という教科書に書かれている以上の知識は持ち合わせていなかった。なぜ祖父がそのような歴史上の事件について、何らかの手記を遺す理由があるのかわからなかった。そう思いながらも僕は、祖父の性格を顕すように万年筆で黒々と書かれた、かっちりとした文字を追い始めていた。

“叛乱部隊の汚名を着せられし我ら、肅軍の名のもと覆い隠された真実をここに記すものである”

その一文から始まる手記は特に真新しい事実もなく、不当な評価を下されたことへの抗弁が連

ねられているのみで、何か歴史的な発見でもあるかもしれないという、わずかな期待を裏切るものでしかなかった。年若い一兵卒でしかなく学のなかった祖父にとって「昭和維新の断行」などと言われても、実のところ何もわかってはいなかったのだろう。ただ、文章の端々からはこの事件を指揮した青年将校に心酔しきっている熱のようなものが感じられた。

× × ×

決起部隊を率いる安藤輝三大尉は完全に包囲された山王ホテルの一室で、黙したままだ一つの小箱を見つめていた。小箱はいびつな形をしており、ところどころ不可思議な文様が刻み込まれていた。決起に迷っていたとき、大尉のもとを訪れた壮士風の男が置いていった小箱だと、不思議そうに見つめる私に教えてくれた。

当番兵として側に仕える中で、大尉からはたくさんのことを教えられた。学のない私が静かだが熱意を持って語る大尉の理想の万分の一すら理解できていたか疑問だったが。しかし、大尉が日々の糧にも困る者たちのことを心から案じ、この世を変えねばならないと真剣に考えていることだけは私にもわかった。決起の話を聞かされたとき、大尉についてゆくと決めるのにそれ以上の理由はいらなかった。

しかして現実は一。

「大尉、その箱を開ければ維新は成るのでありませんか？」

私の問いに大尉は苦笑で応えた。

箱を揺らすとことりことりと音がした。

「あの男はそう言っていたよ。この箱を開けた者は神の力の一端を垣間見ることができ、その力を得ることができるのだと」

「ならば！」

その男がペテンであったとしても今更失うものなど何もないのだから、箱を開ければいい。私は素直にそう思ったのだ。このまま叛乱部隊の汚名を着せられて処断されるくらいなら、胡乱な者の言葉であってもすぎるべきだ。私であればためらいもなくそうしただろう。

しかし大尉はゆっくりと首を横に振った。

「維新は神ではなく人の手によって為されねば意味がないと私は思うのだ。今ここで私が倒れたとしても、そのあとに続く者がきつと現れる。たとえどんなに道のりが遠くともいずれ維新は成ると信じているのだよ。ならば喜んで私はその礎になろうと思う」

そうまで言われては、私にそれ以上かける言葉はなかった。表情に戸惑いが表れていたのだろう。大尉はぼんと私の肩を叩くと、あの小箱を手渡した。

「お守りだ。お前が持っていてくれ。そしてお前が、お前たちが私に続いてくれ。そのためには生きろ。なんとしても……地を這い、泥水をすすってでも生き続けろ」

それが私が安藤大尉と交わした最後の言葉だった。

そして——遠く銃声が響いた。

安藤大尉は一命を取り留め、特設軍法会議の場に立つことになった。

だが、それが幸いであったかは私にはわからない。むしろその後の成り行きを思えば、あの場で自決した方が大尉らにとっては幸せだったかもしれない。

伝え聞いたところによれば特設軍法会議とは名ばかりで、大尉らは抗弁する機会すらろくすっぽ与えられないのだそうだ。非公開の裁判で誰にも知られぬまま、昭和維新という理想を闇へと葬り去る。それが大尉らが軍閥と呼んだ、軍上層部の意向なのだと言われ、兵営内ではまことしやかに囁かれていた。

「私は維新への道程の礎となる。あとはお前が、お前たちが私に続いてくれ」

床に就くといつも、別れ際に交わした安藤大尉の言葉が耳に響き続けていた。

しかし、ただの一兵卒の私が安藤大尉らの遺志を継げるとは思えなかった。ならば生きる。生き続け、大尉らの理想を忘れないことが己が使命なのだと、私は胸に刻んだ。

そんな私の想いを嘲笑うかのように大陸出征が決まったのはほどなくだった。出征する私たちを前に連隊長は言い放った。「白骨となって満州から帰還せよ」と。もはや怒りもなにもわかなかった。来るべきときが来た。そう思っただけだ。決起に参加した者たちをどうにでも地上から消し去りたい者たちがいるのだ。

人はここまで卑劣になれるのか。

私は生き、そして伝えるという最低限の約束すら果たすことができないのか。

そのときの私はもう人の世というものに幻滅していた。

出征の日、背囊の中でことりと何かが鳴った。安藤大尉に託された小箱だった。この小箱を開ければ神の力の一端を垣間見ることができる。神が出るか悪鬼が出るか、それは開けてみなければわからない。この箱を開けることで人としての自分を捨てることになっても構わないとさえ思えたのだ。

金属製の小箱は意外なほど簡単に開いた。

箱の中にはぼんやりと光を灯す、まるで切子細工のような結晶が金属製の帯と奇妙な形をした七つの支柱によって支えられ、鎮座していた。

これで神の力に触れられるというのだろうか。

結晶の奥を覗き込む。

どくん。

どくん。どくん。どくん。

早鐘のように鼓動が激しくなる。

なんなんだ、これは。

頭の中を何かが這い回るような感覚。脳内の隅々まで探られるような不快さの中で、私は大

okaeri

声をあげて逃げ出したい衝動に苛まれていた。

なんなのだ。

この結晶の中に“棲る（いる）”のは何なのだ。

神？ 悪鬼？

わからない。わからない。

ただ結晶の中——否、遙か向こうの世界から私のことを見つめている存在がいる。

目、目、目……ああ、ああ……目だ！

“不死ノ肉体ガ欲シイノダロウ？”

そうだ。そうなのです。

約束……約束なのだから。あの人との約束を果たさねばならないのだから。

なんとしても還らねば……還らなければならない——。

× × ×

そこまで読み進めたところで僕はどくりと唾を飲み込んだ。

手記の最初の方に見られた几帳面なかつちりとした文字が、この段になると乱れに乱れ、判別することすら難しくなっていた。

だが、手記ははまだ三分の一ほどを残している。この先に何が書かれているのか知りたいという欲求と相反する、読み進むことへの躊躇いが僕の中に生まれた。

好奇心と恐れ。その二つの感情が自分の中で相対して——そして好奇心が勝った。

「ここまで読んだんだ、最後まで読まないわけにいかないだろ……」

自分に言い聞かせるようにつぶやくと、震える手で更に頁を繰る。

「！！」

そこにあったのは文章でも文字でもなかった。前頁までとは違う、赤黒いインクで描かれた目、目、目。

頁を大小の目が埋め尽くしていたのだ。

その絵が“あの日”襖の隙間から見た祖父のぎょろりとした目が僕の中で重なり、呼吸が苦しくなる。

どくり。どくり。

動悸が激しくなり、僕は胸を押さえたままその場にまるで胎児のような格好で丸まった。

だが、動悸は治まることなくさらに激しくなる。

嫌だ……こんな手記なんて読むんじゃなかった。

故郷にだって帰ってくるんじゃなかった。

okaeri

目だ。

今もどこかから視線を感じる。

どこだ。どこなんだ。

わからない。わからないけれど、確かに誰かに視られている。

“約束……ダカラ……還ッテキタ……”

還ってきた？

いったい誰が……？

頭の中で問いを発しながらもその問いの答えを、僕は薄々感じ取っていた。

ふしゆるるる。

ぬちゃりぬちゃり。

襖の向こうから粘着質の物体を引きずるような音が聞こえる。

そうだ……還ってきたのだ……。

人ならぬ存在と変わり果ててもなお、約束を果たすためにあの人——そう、僕の祖父が。

いや、“祖父だったモノ”が。

近づく……近づいてくる……。

ああ、襖が開く。開いてゆ……く……。

× × ×

かたん。

硬質の音とともに喪服姿の男は小さな金属の箱を閉じた。

やはり表情はけぶって見えないが、男の口の端だけがわずかに満足そうに微笑んだのがわかった。

オカエリナサイ——。

(了)